

## 立教大学における 国際教育交流の現状

国際センター長、法学部教授  
松田 宏一郎 氏

○丸山 どうもありがとうございます。

それでは続きまして、国際センター長の松田先生、どうぞよろしく願いいたします。

○松田 ご紹介にあずかりました、立教大学の国際センター長の松田でございます。本日、あまり時間がなかったので手短に国際センターの仕事と関わる中で、日本語教育センターにさまざまな期待をしているという点についてお話ししたいと思います。

お手元にもプリントしたものがあると思いますが、先ほど山口教授のほうからも説明がありましたが、現在、海外とのいわゆる協定を結んでいる大学の分布と、これを世界で見ると、大体、割とバランスよく、つまり左側を見るとヨーロッパ、それから東アジアを中心にしたところ、それからオーストラリア、それから北米ですね。もうちょっと開拓したい場所もあるのですが、広がっております。**【スライド②-2】**

先ほど数の話も出しましたが、現在協定を結んでいる大学は、大学対大学のレベルで53大学、4機関。機関というのは、いわゆる大学という名前を取っていないけれども、研究機関であったりするということです。それから、学部レベルで何々学部と何々学部、例えば経営と経営とか、そういうのが63あります。プラス3機関ですね。全体を合わせますと116ぐらいあるということです。

**【スライド②-3】**

なぜ提携が大事かということ、国際センターの仕事というのは多岐にわたりますが、一番重要な仕事のうちの1つに、立教から海外に学生を送り出すということ、

それから海外から学生を受け入れるというのがあり、その中心になっているのが、こういう提携機関との学生の交換です。なぜ交換したいかという、1つは、日本の大学のほとんどは、例えばヨーロッパの大学などと比べると、授業料がかかるので非常に負担が大きい。ところが、交換をすると、普通はお互いに授業料を免除しましょうという約束をするんですね。そうすると日本に、特別に授業料を払わなくても勉強に来られる。こちらからも、逆に言うと、海外に送るときに、授業料を取るところでも払わなくていいとか、それから奨学金とか寮とか、幾つか、ある意味で特権的な地位を与えてもらえるというところがあります。それからビザの取得も容易であるということもあって、協定というのは非常に大事な仕事の1つになっております。

この結果何が起きたかということですが、海外からの留学生の全体数というのは順調に伸びてまいりました。2011年にちょっとカーブがへこんでおりますが、これは震災のせいで、このときはちょっと日本に来るのを遠慮したという学生が多かったせいです。このグラフを見ていただくと、下のほうのグリーンのようになったところ、これはいわゆる正規留学生と我々と呼んでいて、日本人のほかの学生と同じように、1年生から入って、卒業までしていく学生です。現在ですと、大体そういう学生が400人ぐらいおります。上の少し紫がかったところの学生、いわゆるこれが提携先との交換で受け入れている学生の数で、大体100人ちょっとというふうになっております。2012年度の数字では、既に震災前の2010年を超える数字に復活いたしました。これはさまざまな理由がありますけれども、1つは、2011年に来る学生が抑えられたというか、来なかったせいで、後ろに多くなったということと、それから、こここのところ年々、提携校を積極的に増やしておりますので、日本に送り出すという学生が増えたということで、先ほどありましたが、以前に李教授の答申にあった500人を目指すというのは既に、そういう意味では、数的には超えたと言えると思います。これが今の数字の内訳です。【スライド②-4、5】

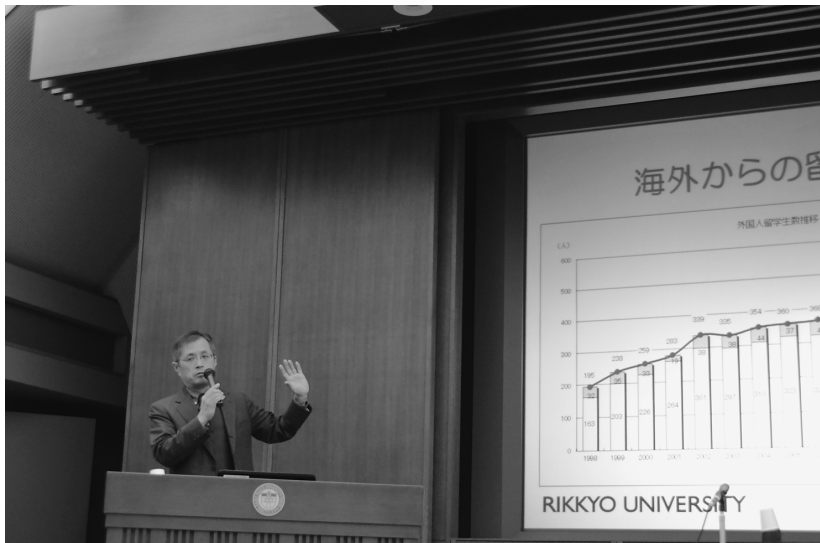
こういったことを前提に、実は日本語教育センターができてから、幾つか非常に重要だと思われる点があります。現在、9レベルで授業を展開していただいていることです。つまり、全く初歩、日本語でなにか言われても全然分かりませんという人から、専門書が読めて、専門的な知識について議論ができるというレベルの人まで、9段階で授業を展開していただいておりますが、これにはそれぞれ

国際化センターから見ても重要な意味があります。

例えば、この1番目に挙げましたのは、全く初めて、全然日本語できませんという人が来た場合にどうなるかということです。まず、そういう人が来るのかということですが、来ます。どういうケースで来るかというと、1つは、母校の大学に日本語コースというのを特に置いていない。それから、例えば中等教育ぐらいのあたりでは日本語を習う機会がないような国から来る場合。でも日本で絶対に勉強したいというような人が来る場合があります。これはヨーロッパでもありますし、アメリカにもそういう大学がありますし、そういったところの学生は、いわば、まず日本というものに最初に触れにくる、コンタクトに来るわけです。【スライド②-6】

それからもう一つ、全く別のケースで日本語が初めてという人は、特定の非常に専門的な学問分野であるとか、それから職業、例えばビジネスですね。そのために日本を知っている必要がある。ただし、日本語を、日本語として勉強している時間はあまりないという人がいます。

この2つの学生はレベルというか、いわゆる動機付けが違うのですけれども、いずれにしても、アカデミックな日本語を磨くというよりは、まず日本語や日本



の社会に接するということが最初の目的にしているわけです。では、なぜそういう学生に来てもらうことが大事かということ、こちらから向こうに送るときも、別に日本語、日本語コースはないのだけれども、例えばビジネスの分野で非常に秀でていたりとか、あるいは、普通は日本人の学生が行かないような地域であるとか、そういったところにも行きたい学生はいるので、ぜひそういうところに提携先を確保したいわけです。そのためには、いわゆる日本のものに深く触れる機会がないような地域や、そういう大学とも提携を結んでおくというのは、立教大学の留学の幅を広げる上で非常に意味があります。

それから2番目。これは例えば、欧米の割とトップのほうの大学とか、それから東南アジアなどで漢字文化圏ではないところなどは、日本語はある程度やっている、しかし、ものすごく流暢というわけではないという学生が来ます。こういうところは、学生が希望する留学先として人気があることが多く、実は交換先のオプションの厚みを増すことができます。

それから、3番目ですけど、今度は逆に、ものすごく日本語ができる留学生です。例えば立教大学は、単にナショナルティーで分けると、実は韓国人の学生が一番多いのです。韓国の学生の多くは、1年生から入ってくる正規の留学生です。正規の留学生は、すぐにほとんど、日本語は日常とか、普通の授業では困らなくなるほど基礎力をもっています。ただ、論文を書いたりとか、そういうときのレベルだと多少対応が要ります。あるいは大学院で、日本研究とかで入ってくるという、非常にレベルの高い学生がいます。こういったところは、いわば、もともとモチベーションがはっきりしています。日本語レベルが高い学生は、その後大学院で研究を続けることが多く、また日本研究のレベルが高い大学は、立教から学生を派遣する先としても魅力的といえます。

このように、1番目のように、最初に日本にコンタクトに来る学生、それから2番目のように、日本には関心があるけれども、日本語はまだこれから勉強しなければならない学生。それから3番目には、非常に上手な学生というのがやって来て、それぞれに今、対応しているレベルが、日本語教育センターにあります。これは逆に言うと、こちらからは、ある意味で厚みを持った留学先を持つことができる。例えば2番目の、日本語が中級程度の大学というのは、実は学生自体のレベルは意外と高いことが多くて、日本語を勉強に来ましたけど、その前に3つぐらい外国語をやりましたとか、そういう学生も結構いますので、逆に送り先

としても魅力的なわけではあります。

国際センターから見ると、こういう多様なレベルに日本語教育が対応していただいているおかげで、こちらから送るときも選択肢の幅があるわけではあります。多様な学生に合わせた大学を選ぶことができると思います。

今後、日本語教育センターと一緒に開発していきたいのは、日本に留学するときの最初のコンタクトとして、今だと半年とか1年という交換が多いのですが、もっと短い、3週間とかというプログラム、しかもちゃんと大学の修了書とか単位とかが出せるようなプログラムです。英語圏とか、中国語、韓国語でも、実は多くの海外の大学が、ショートプログラムをやっているのでも、それと交換ができるのではないかと思います。つまり、うちに3週間引き受けるから、3週間引き受けてくれませんかという交換ができる。そうすると、学生の負担感も少なくなるし、半年、1年、留学するのは重いけど、まず3週間だったらやってみようかという学生を送り出していき、そういうきっかけにもなりますので、これもぜひ、今後進めていきたいと思っています。【スライド②-7】

いわば留学生を送り出したり、受け入れたりしている者からして、日本語教育センターがこういう役割を果たしていただいているということと、今後こういうことを開発したいという点について、整理してみました。ありがとうございました。(拍手)

【スライド②-1】

**立教大学における  
国際教育交流の現状**

日本語教育センターシンポジウム2012  
国際センター長 松田宏一郎

**RIKKYO UNIVERSITY**

【スライド②-2】

**海外大学及び研究機関との提携**  
～大学間協定校・機関分布図～



**RIKKYO UNIVERSITY**

【スライド②-3】

## 海外大学及び研究機関との提携

\*2012年6月現在

大学間交流協定： 53大学4機関  
 (うち学生交換協定締結は48大学)

学部間交流協定： 63大学3機関  
 (うち学生交換協定締結は50大学)

**合計： 116大学7機関**

地域はアジア・北米・欧州が中心、  
 一部アフリカ等

RIKKYO UNIVERSITY

【スライド②-4】

## 海外からの留学生受入



RIKKYO UNIVERSITY

【スライド②-5】

## 海外からの留学生受入

- ・2012年6月現在で正規留学生394人、特別外国人学生（交換含む）118人の計**512人**
- ・出身国・地域の上位3カ国：
  - ①**韓国 229人（45%）** 震災の影響で横ばい
  - ②**中国 156人（30%）** 前年108名から増加
  - ③**台湾 17人（3%）**
- ・2011年度は東日本大震災の影響で在籍数が急減、正規留学生数はまだ完全には回復せず

RIKKYO UNIVERSITY

【スライド②-6】

## 日本語教育の役割

- ・戦略的対応の必要
- ①初めて日本語を学ぶ留学生への教育→母校に日本語コースがない大学からの留学生、日本語や日本文化よりも、特定の専門的学問分野や職業を考えている（ビジネスなど）への対応

RIKKYO UNIVERSITY



【スライド②-7】

②日本語中級者の教育→欧米、東南アジアなど漢字文化圏ではない地域からの留学生。学生のレベルは高いことが多い。将来高度な日本語を使えるようになることを期待。

③日本語上級者への対応→日本語教育がさかんな地域、あるいは日本研究専攻など大学院レベルの留学生。

④ショートプログラムの開発→日本に留学する動機付け

RIKKYO UNIVERSITY